静岡大学理学部同窓会会報

NO. 3

発行所
静岡大学理学部同窓会
静岡市大谷836
静岡大学理学部内
Tel 0542-37-1111(代表)
会長　赤池大樹

第二回総会を迎えるにあたって

理学部同窓会会長　赤池大樹

月日のたつのは早いもので同窓会設立総会を持ちましてからもう三年がたち、この七月には第二回総会を開くことになりました。この間、会員の皆様方のいろいろなご協力を頂き会が順調に運営出来ましたこと、まずは御礼申し上げます。

さて、静岡大学理学部同窓会会員もこの三年間で、数学科一二三名、物理学科一五九名、化学科一二九名生物学科九四名、地球科学科九十名の新会員を加え、総計二六〇〇余名の大きな会となりました。同窓会の目的の一つは、我々会員の住所の確認にあります。残念ながらすでに亡くなられた方もおられますが、また住所の確認できない方も多数おられます。是非相互の連絡をとりあってより正しい名簿を作りたいと思います。

年間行事の一つですが、今年も三月十九日に静岡大学の卒業式が行われたあと理学部の祝賀会が開かれ、同窓会として参加してまいりました。私が卒業した昭和四十四年三月は、丁度学園紛争の激しい年で駿府会館も騒然としていて、ヘルメットをかぶった全学連の学生がデモをしていて、卒業式のめでたさという雰囲気はなかったように憶えております。が最近は大学も安定していて学内も平静です。また理学部にも女子が多くなり、祝賀会もとても華やかな雰囲気に包まれています。最近、新人類という言葉も生まれましたが、ほんとうに最近の学生は恵まれていて、下宿の部屋には冷蔵庫、テレビ、ステレオなどがあります。我々のころは机と布団、せいぜい電気コタツにラジオでした。ずいぶんかわりましたね。さらにたいていの学生はオートバイを持っていて、中には車通学という学生もいるようです。最近の調査で学生一人一ヶ月のこずかいは約二・三万円で学生の五割近くは海外旅行の経験者といったように、本当にすばらしい学生時代を送っています。卒業後は、大学院へすすむ人、一般企業へいく人、公務員になる人等いろいろな方面で活躍をしています。しかし、その大学へ入学するためには入学試験に合格しなければなりません。私は高等学校の教員をしており、現場で入試の実態を見ていますとなかなか大変です。特に共通一次以後コンピュータでの偏差値処理が簡単になり国公立大学が共通のテストを行うため大学の序列化がなされました。そのためそれまでは高校独自で進路指導をしていましたが、以後は全国規模での個人の実力を知る必要がでてきました。それ故業者の模擬テストが多くなり、我々高校側もこれに依存することを余儀なくさせられました。一回の模擬テスト代金が本校だけで約一〇〇万円で、年間四・五回程行いますので本校だけでも四〇〇万円が業者に支払われます。これが今、予備校や模試業者の躍進につながっています。さらに今年から入試制度が変わり、A・Bグループの複数受験化がなされましたが足きりが多く出て大変問題になっています。本当に良いほうに改革されたのか疑問です。いずれにしてもこれからますます大学に入ることが難しくなるのではないでしょうか。とりとめもない話になってしまいましたが、現在の平和な物質に恵まれた時代がいつまでも続くことを願わずにはいられません。我々静大理学部OBも同窓生であるということを認識し、お互い社会のどこかで出会ったときなんらかの力添えが出来ればと思います。

静岡の町も少し変わりました。大岩の静大あとは公園に、駿府会館はとりこわされました。また静岡駅が新しくなり駅周辺も整備されました。しかし、相変わらず富士山はとても美しいです。是非七月五日の総会には静岡へおでかけ下さい。まとめ役は我々静岡に住む者の義務と考えておりますので今後ともご協力お願い致します。

（数学科第一回卒）

地球のなぞ

藤岡換太郎

「うわああれは一体なんだ？」潜水艇の中から思わず驚嘆の声が上がった。一九八五年七月二十二日私はフランスの潜水艇ノチール号に乗って、常磐沖の第一鹿島海山付近の深さ五七〇〇mの日本海溝陸側斜面を探検していた。私が感動し驚嘆したのは、白い二枚貝の群集がまるでお伽の国のように横たわっている姿が目に映ったからだった。

地球を取り巻く広大な海。そこには一体何があるのだろうか？太古より人類は海と深い関係を持ってきた。二十世紀の初頭まで深海は永遠に不動であるという考えが支配的であったが、一九六〇年代に海洋底は中央海嶺で生まれ海溝で消滅するという「海洋底拡大説」とその後に「プレートテクトニクス」という考えが登場しこの考えはもはやすたれた。中央海嶺では地下深所からマグマが上昇し新しい海底が形成されている。一九七〇年代にフランスやアメリカの潜水艇が中央海嶺に潜り、ブラックスモーカーと呼ばれる煙突から金属に富んだ高温の熱水が噴出し、その周囲からパイプ状の生物や二枚貝、カニなどの群集を発見した。この発見は、陸上の金属鉱床の成因に新しい解釈の糸口が見つかった事、太陽以外のエネルギーを用いた生態系が深海底に存在する事が分った点で画期的なものであった。

一方、海溝では中央海嶺からはるばる旅をしてきたプレートが沈みこむ為、火山活動や地震活動などの地球科学現象が起こっている。海溝域は水深も深く長い間人類の観察を阻んできた。日本周辺の海溝域を潜水艇で直接観察する計画（KAIKO計画）が日仏共同で始められた。潜水に先立ち南海トラフ、銭洲海嶺、駿河トラフ、相模トラフ、海溝三重点、第一鹿島海山、日本海溝、襟裳海山などの地形調査が行われた。私が発見した当時世界最深の生物群集は、第一鹿島海山付近の日本海溝陸側斜面に直線上に分布していた。生きた二枚貝は、体の2/3を推積物の中に埋ずめ1/3を海底から突出させ、殻の間から鮮血色の肉をのぞかせていた。その様は、ひなびた温泉で湯治客がひっそりと湯にひたっているような感じであった。これは中央海嶺系の特定の熱水噴出と結び付く生態系とは異なる。このような生態系を維持する栄養は、海底の堆積物中から絞り出される水にあるらしい。

潜水艇によって太陽光線の届かない暗黒の深海底にもこのような生物の営みを垣間見る事が出来た。しかしそれは広大な海洋のほんの一部にすぎず、海底にはまだまだ我々の知らない不思議なナゾが存在しているにちがいない。

（地学履修コース第三回卒）

最近の理学部の状況――(2)

生物学教室　和田清美

バイオ・ブームも大分落ち着いてきました。生命科学の基礎でもある生物学は、着実な歩みを続けている分類・形態・生理・遺伝・発生生物学などの分野に加えて、二十世紀後半に特に進展した地球レベルでの環境生物学、さらに核酸から蛋白質への遺伝情報の発現機構の解明に寄与してきた分子生物学、それに伴うバイオ・テクノロジー（生物工学）などの新しい分野を含み、二十一世紀へ向けて一層の発展が約束されています。

さて、理学部生物学科は、昭和二十四年発足の文理学部を母体にして同四十年四月誕生しました。それから二十二年、その間に修士課程も加わって教育・研究・諸設備ともますます充実して来ました。しかし非常に残念なことですが、昨年十二月に生理学講座の石川彬助教授が急逝されました。また、この三月に生理化学講座の草間慶一教授が停年退官されます。その他、この二三年の間に新制大学発足当時に赴任された先生たちが各教室ともつぎつぎと退官されます。これらにより理学部全体として、また生物学教室としても大きな交替期を迎えたわけです。既に一部の人事が進み全体として若がえりつつあります。あまりに極端な変革でなく、新進の気を導入しつつ内部充実を計り、二十一世紀に目を向けての大きな変身にしたいものです。

次に、卒業生の近況について報告しましょう。特筆すべきは理学部諸君の兄貴分、文理学部・第五回卒業生の蛭海啓行君でしょう。彼は、昨年秋に野口英世賞を受賞しました。そのために一時帰国しましたが、現在もケニヤのナイロビにあるILRAD（国際家畜疫病研究所）にて夫婦で活躍中です。理学部卒業生の諸君もそれぞれの分野で頑張って、いろいろな形で社会に貢献されるよう切に希望します。各人、日々を確実に生きて行くことが、諸々の結果に至る第一歩です。蛭海君の場合もしかりと思います。それでは。五年、十年後のこの欄を楽しみに筆をおきます。

渋谷先生の思い出

福田京平

先生の御逝去の報は、卒業後、疎遠となり、豪放闊達な笑顔と、細身ではあるが骨太の頑丈な御身体しか思い出せない小生にとっては、大きな悲しみと驚きでした。未熟な小生が先生の思い出を語るのは役不足ではありますが、二～三書き記したいと思います。

（故　渋谷元一先生）

なにはさておき、一番印象に残っているのは電磁気学の講義です。ファインマン著の「物理学」を教材としましたが、単なる知識、技術だけでなく、ファインマンの心、あるいは「物の理」そのものを説かれた非常に立派な内容でした。日常生活におきましては学生一人一人のことまで真剣に考えられ、就職、進学、果ては結婚まで御世話になりました。特に、コンパ、大学祭には殆んど皆勤で出席され、学生と共に酒を酌み交わし、いろいろなお話しを伺ったことは、今なお良き思い出として深く脳裏に焼き付いており、人生の励みとなっています。

最後になりましたが、心より御冥福をお祈りします。

（物理学科第一回卒）

学科同窓会だより

物理学科同窓会よりの報告

野口和廣

昭和五十八年二月、突然現理学部同窓会長赤池君から電話があった。理学部の同窓会を作る機運が熟していると言う。物理学科以外の各学科では、それぞれ学科単位の組織ができていて、会員の住所もけっこう把握されているという。二回卒の竹下君と三回卒の土肥君に連絡を取って、久し振りに大学へ出かけ、米山先生、小島先生、森口先生、渋谷先生、中山先生に会って情報をもらい、何回かの往復葉書きのやりとりで、やっと物理学科の名簿が出来上ったのが十月。ほっとしたのも束の間、次は同窓会設立総会だ。

慌ただしく出来上った物理学科の同窓会組織らしきものですが、四年経った現在まで、活動らしき活動もないまま時間が経過してしまいました。ただ、少し満足していることは、竹下昭二君、松山初男君、浅野安人君と、強力なメンバーを、理学部同窓会に送り込んでいることです。

今後、物理学科としてのまとまりもおいおい必要になってくると思いますが、同窓生諸君、その節は、よろしく。

（物理学科第一回卒）

「駿化会」について

杉山卓之輔

化学教室同窓会は、昭三十九年三月八日業績発表会の日に万場一致めでたく誕生した。しかし、会にふさわしい名称が仲々浮ばず、幹事一任ということになった。その後、麻生先生から話をきかれた大村先生が、渡米前に「駿化会（スルカ）」を御提案され、名称が決定した。

会則では、総会は原則として毎年一回開く（業績発表会の時）、また会費年二百円であった。

「駿化会誌」の創刊号は、その年十二月に発刊された。それ以前、名簿は毎年だされていたので、会員動向の把握は比較的簡単であったが、会誌ともなると、体裁として他の記事も必要であり、編集がまゝならず、また名称のこともあって発刊がおくれた。

「駿化会誌創刊に当って」の文中で、麻生先生は、昭四十年四月の理学部発足を大へん喜ばれているとともに、学生諸君に対し、次のようにいわれている。「諸君が世に出て、お互いに助けあい、励ましあう機会がえられたらとの思いで駿化会が作られた。大いに利用し懇親の会としていたゞきたい」と。

「駿化会誌」は二号（昭四十一、三）三号（昭四十二、十一）と同様の企画で発刊されたが、四号（昭四十七、三）五号（昭五十五、三）は名簿のみとなった。総会も回数が減り、昭五十五、四以来開かれていない。この前後、先生方の還暦や御退官等で各担当教室毎に会がもたれたに過ぎない。会員の数も増え、役員も多忙となり、運営が大へんになった。近々、「駿化会」の再開をと長谷川先生とともに願っている。同窓生皆様方の御協力を賜わりたい。

（文理学部化学科第五回卒）

同窓会活動報告

同窓会長　赤池大樹

昭和六十一年五月十日(土)
出席者(数)赤池、土屋（物）野口、竹下、(化)石渡（生）横沢（地）佐伯
議事
一、活動報告と会計報告
二、会報について
三、会費納入依頼について
四、第二回総会について

六十一年八月三日(日)
出席者(数)赤池、佐藤、岩田、土屋、半田、帯川（物）野口、浅野、佐野、竹下（化）杉本（生）横沢、平松（地）佐伯、大浦
同窓会会報と会費納入依頼の発送作業

六十一年九月二十七日(土)
出席者(数)赤池、土屋（物）竹下（生）平松
・名簿の整理
・組織の改善すべき点について
・今後のスケジュール

六十一年十月二十五日(土)
出席者(数)赤池、岩田（物）野口、浅野、竹下（生）横沢（地）佐伯
・総会の日時、会場等の決定
・組織の検討

六十一年十二月六日(土)
出席者(数)赤池、嶋（物）野口、浅野、竹下（生）横沢（地）加藤、佐伯
・住所の確認
・第三回会報発行について
・六十二年三月卒業生、卒業式について

昭和六十二年一月二十四日(土)
出席者(数)赤池、半田、原、土屋、山崎、宇佐美（物）野口、松山、浅野、竹下（生）平松、横沢、金子（地）加藤
・会則の検討
・名簿発行の作業
・第二回総会について

六十二年二月四日(水)
大学へ訪問、卒業生へ名簿等をわたす。
赤池、野口、加藤

六十二年三月十九日(木)
卒業式、祝賀会に参加
赤池、野口、加藤、竹下、浅野

片山移転時代の追想

加藤国雄

大学紛争が沈静化しつつあった昭和四十五年、静岡大学が大岩から片山に移転して間もなかった。当時、片山のバス通りにはまだ未舗装の部分があった。東名高速道路が走っていたとはいえ、大学から西を見渡せば田畑が一面に広がり、所々に民家や下宿が散在する程度であった。夏の夜に農道を歩くと、蛍を見掛けることも珍しくなかった。秋になると、手入れされなくなった学内の山にもいたるところに黄金色の蜜柑が見られた。学内も今とはちがっていた。一言で言えば、のんびりしていたのだろうか。数年のうちに各学部の増設、農学部の移転、正面玄関の設置が行われ、より一層大学として充実してきたように思われる。さて、地球科学科が誕生したのは昭和五十年であり、四十五年当時はこれを地学履修コースと呼んでいた。理学部にある数学・物理・化学・生物のどの学科からでも三年時より履修することができた。教養部では、地学の講義はほんの少ししかなかったが、一つだけ講義の思い出を書いてみよう。現在理学部で御活躍中の鮫島輝彦先生は、当時教養部の担当をして下さった。先生は一年生の一時間目の最初に下宿の地盤について話された。その地盤が、日本平側（東側）ほど良く、地震の時に安全だという話であった。下宿生なら誰でも、どの下宿が良いか気になるものである。学生の心理を良く心得た先生だと思った。机に向かわない勉強として、巡検会も印象に深いものであった。半分がなまけ心、あとの半分が自然に接したいと思う心でその日を待ち望んだ。相良の女神山で石灰岩を見て感動し、二俣から天竜川の流れを見て自然の偉大さに驚かされた。思い出は尽きない。

「神田川」のメロディーが人々に忘れ去られる頃、四畳半の下宿は六畳に代わり学生のバイクは車に代わっていった。時の流れの早さを痛感する今日この頃です。

（地学履修コース第六回卒）

事務局より

一、退官
物理学科
教授　藤原靖名先生
化学科
教授　下村道夫先生
生物学科
教授　草間慶一先生
以上三人の先生方が、昭和六十二年三月をもって静岡大学を退官されました。長い間お世話になりました。今後共、宜敷くお願い致します。御健康と今後の御活躍をお祈り申し上げます。

二、第二回総会
日時　七月五日(日)
午後一時開会
場所　日興会館
（静岡駅前）
以上の通り、開催します。是非、御出席下さる様お願いします。尚、同封の葉書に出欠を記入され、速やかに投函される様重ねてお願いします。当日の講演の講師には、和田先生（地球科学科）が予定されています。

三、お願い
○会報の名称を募集しています。良い名称がありましたら、事務局の方へ御連絡下さい。
○発送した郵便物が、事務局に沢山戻って来ています。住所変更の際には、事務局へも是非御一報下さい。
○会員の投稿を歓迎します。どんな事でも結講です。どしどし御応募下さい。

編集後記

今回も皆様には、快く原稿の執筆を引き受けていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

会報もようやく三号となり、何とか軌道に乗ってきました。特に「最近の理学部の状況」、「各科同窓会だより」は前号での約束どおり、シリーズでお届けすることが出来、編集係一同喜んでおります。

今後も何かシリーズものを中心に紙面を構成したいと考えています。良い案がありましたら、是非、編集係までご一報下さい。また、会員の皆様の自由な投稿を歓迎します。近況など気のついた事がありましたら、どんなに短かくても結構ですから、文章にしてお送り下さい。葉書で結構です。

昭和61年度静岡大学理学部同窓会会計報告

（～S62.3.30）

収入の部	前年度よりの繰り越し	885,719
	会費、寄附	614,000
	61年度入会金	224,000
	利　息	3,266
	雑収入	34,650
	計	1,761,635
支出の部	印刷費	180,800
	通信費	168,180
	会議費、事務用品費等	211,316
	計	560,296
	差引残高	1,201,339

以上報告いたします。　昭和62年3月31日
主事　和田秀樹　金子正純　前田和夫

監査の結果、報告の通り相違ありません。昭和62年3月31日
監事　佐藤洋一　松山初男